

青年海外協力隊

被災者の心に寄り添う きめ細やかなケア

津波で市街地の約6割が浸水し、1000人以上が犠牲となった宮城県東松島市。避難所となった中学校で講師をしていた佐藤国正さんが青年海外協力隊OBという縁で、ニジエールから日本に一時退避中の隊員たちが支援に向かった。避難してきた方々に笑顔を取り戻してほしい。そんな思いで取り組んだ。



市役所から送られてきたさまざまな支援物資を分類する隊員たち（撮影：久野真一）

一時退避中の隊員が 東松島市へ

「これはひどい…」

3月25日、赴任先ニジエールの政情悪化で日本に一時退避していた青年海外協力隊（幼児教育）の白石芳高さんは、有志で集まった他のニジエール隊員とともに第一陣として宮城県東松島市に向かった。被災地に近づくにつれ見えてきたのは想像を絶する風景。それは、家屋、店舗、自動車、漁船…、すべてが津波に飲み込まれ、更地となってしまった。かつての住宅地の姿だった。

「このタイミングで一時退避になった僕たちには、きつとやらなければならぬことがある」。そんな強い思いを胸に被災地入りした白石さん。派遣先は、東松島市立矢本第一中学校だった。「当初、市内には避難所が約100カ



体育館で体を動かしてレクリエーション。中学校の生徒も部活動の一環として協力してくれた

※治安情勢が悪化した場合、JICAボランティアは安全対策として一時退避または赴任国を変更する。

所あり、避難者の数は約1万5000人。市の職員だけではとても対応しきれませんでした」と東松島市役所総務部長の小野弘行さんは振り返る。震災直後、同校で避難所の運営を担っていたのは35人の教員。しかし、24時間体制での対応に加え、卒業式や入学式、新学期の準備といった通常業務も重なり、疲れもピークに達していた。小野さんは、「協力隊の皆さんが駆け付けてくれて心強かった」と話す。

被災者とともに 避難所を運営

白石さんから隊員の活動の一つに、被災者の心のケアがあった。ラジオ体操や子ども向けのプレイタイム、ビデオ上映会などさまざまなイベントを企画。「久しぶりに楽しかった」と自然と笑顔がこぼれる人たちが多かった。

また、受付で被災者の入所・退所手続き、行方不明者探しに訪ねてきた方への名簿の案内、自衛隊の炊き出しの手伝いなどを行ったほか、夜間は一時間おきに校内を巡回。さらに、隊員たちが仕分けた支援物資を住民の代表に各教室へ振り分けてもらうなど、避難



お年寄りが楽しめるイベントを開催し、司会進行を務める山本さん（左奥）

また、身内がいないお年寄りが着替えられずに不衛生な状態になっているなど、新たな課題も見えてきていた。「大勢の人がいる所では話せないという声を受けて談話室を設置したり、震災で敬老会が中止になり残念というお年寄りのために交流を図るイベントを実施したりと、何気ない一言から会話を深めて

者の人たちにも積極的に動いてもらうようにした。

今年3月までの約半年間、ニジエールで幼児教育の改善に取り組んでいた白石さん。現地の幼稚園でいつも心がけていたのは、地元の先生のやり方を否定しないこと。何か課題があった時は、プラスアルファとして自分の考えを聞いてもらうようにしていたという。

何気ない一言も逃さない 細やかな対応

同じくニジエールから一時退避中の山本実生隊員（青少年活動）は、第二陣として4月2日に同校に派遣された。ライフラインやお

など、生活環境が改善されていく一方で、仮設住宅や親せきの家などに移っていく人も多かった時期。常に変化する現状に適應する必要があります。山本さん。

また、身内がいないお年寄りが着替えられずに不衛生な状態になっているなど、新たな課題も見えてきていた。「大勢の人がいる所では話せないという声を受けて談話室を

設置したり、震災で敬老会が中止になり残念というお年寄りのために交流を図るイベントを実施したりと、何気ない一言から会話を深めて

ニーズを読み取るよう協力隊全員で努力しました。ニジエールでの活動期間はわずか2カ月半だったが、その中で学んだのは「思ったように活動が進まないときに、AがダメならBをやってみよう」という発想の転換だった。「ニーズが刻々と変化していった今回の活動でも役立ちました」と山本さんは話す。

同校の千葉和彦校長は、「協力隊が来てくれたときは皆さんが天使に見えました。第一陣が帰るとき、被災者の中には涙を流し、彼らが乗ったバスにずっと手を振る人もいた。親身になってケアしてくれていたからでしょう」と語る。また、第二陣に同行したJICA青年海外協力隊事務局の土居健一さんは、「避難者の方から、協力隊が避難所運営のやり方を整理してくれたおかげで、自分たちがどのようにかわればいいのか分かりました」という言葉をいただきました。被災者にとって大きなものだったようだ。

避難所としての役目を終えた矢本第一中学校は4月21日に新学期を迎え、普段の学校の姿を取り戻そうとしている。支援に当たった隊員たちもそれぞれ、新しい赴任先に派遣されることが決まった。今度は東松島市での経験を途上国へ。隊員たちの新たな挑戦は始まったばかりだ。

視察に訪れたJICA職員ら（手前）に説明を行う東松島市の阿部秀保市長（右）と総務部長の小野さん（撮影：久野真一）



東松島市立矢本第一中学校の千葉校長。「隊員のみなさんのおかげで私たちは学校再開に力を入れることができました」（撮影：久野真一）